

早稲田大学博士論文(審査報告書)		
	学位記	文科省報告
2004	3885	甲 ② 1963

博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

## 加納克己「操り人形かしらと操法の変遷—遺跡出土かしら・かしら編年・操法考—」

本論文は、弥生時代から十九世紀までに作成された日本の人形かしらの、詳細な調査に基く、劇人形の構造と操法の歴史的研究である。調査対象数は、劇人形に限っても四千数百箇、申請者の三十六年にわたる各地の人形座（かしらのみ残る廃座を含む）調査、十四年間の出土かしら調査の研究成果であり、B5版二段組九百余頁に及ぶ労作である。第一章 遺跡出土の操り人形かしらとその周辺、第二章 古浄瑠璃人形かしらとその周辺、第三章 かしら編年に向けて、第四章 人形の操法（操作構造）の変遷、付章 各地の式三番人形とその詞章について、からなる。

本論文の特色は、現在までに知られる遺跡出土かしらのほとんどすべてを手にとって精査し、それらの考古学上の推定使用年代を手がかりとして、日本各地の人形座に伝存する古浄瑠璃人形かしら等に関し、構造と操法から製作年代を考定し、その成果を人形浄瑠璃史研究の本流に位置づけ得たところにある。劇人形かしらの伝存品は、申請者の推定によれば全国に約一万箇あるが、紀年銘を持つものとしては、長野県黒田に残る元文二年（1737、すでに現行文楽につながる義太夫節人形浄瑠璃時代）のかしらが最古であり、十八世紀末までの紀年銘を持つかしらは二十五箇にとどまる。十七世紀（基本的に古浄瑠璃時代）の製作とみられるかしらも相当数現存するが、十七世紀の人形・舞台に関する限られた文献資料、画証資料によって、それらの製作年代を考定することは困難であった。

このような学界状況に対し、本論文は出土かしらと伝存かしら、という物質資料と、人形浄瑠璃史研究の俎上に上っていた文献・画証及び、その他の史料との接点を、本格的に追求し、具体的成果を示し得た、画期的業績である。申請者は、まず第一章で弥生時代・古代・中世の出土品の中から、約二十点を操り人形（動物を含む）ないしそのかしらと認定する。先学永田衡吉氏（1893～1990）が紹介した五点を除き、申請者がはじめて演劇学界に紹介するものである。つぎに近世の出土品からは、二十数点を操り人形かしらと認定し（いずれも申請者がはじめて演劇学界に紹介）、近世出土の操り人形かしらで、十七世紀初期から十八世紀前期（1736年以前）の人形浄瑠璃に使用されたと考えられるものに、古代・中世出土品にもある「刳抜きの無い、喉木彫付けのかしら」(①)、「十七世紀中葉から末葉頃」の出土品で、古代・中世出土品にはない「刳抜きの有る、喉木彫付けのかしら」(②)、1736年を下限とする出土品で「現在の文楽と同様な刳抜きのある喉木別のかしら」(③)の三形式があることを指摘し、「浄瑠璃かしら」は①②③の順に「発展してきたと云いうる」と結論づける。

この発展方式を基準として、第二章以下の各地に伝存するかしら、とくに古浄瑠璃系かしらの年代考証等が行なわれ、単にかしら研究の範疇にとどまらず、人形浄瑠璃史の諸問題に新たな局面を拓く優れた見解のいくつかが提示されていく。

本論文は、複合的・学際的研究方法を用いる点で画期的であるが、そのために各領域の専門化された方法論などを十分に吸収しきれていない部分も見受けられる。具体的に指摘すれば、以下のような点である。

まず、考古学の立場からみると、中・近世、とくに十七世紀以後の例については問題がないと思われるが、古代の例については、操り人形の起源をより古く遡らせたい一心からか、やや恣意的、断定的に過ぎ、結論の当否とは別に、方法上いささか疑問なしとしない点もある。

中世史学の立場からは、「二〇〇三年には、鎌倉市の円覚寺門前遺跡から一四世紀前半の後半期の山猫のかしらが出土して、首掛けの箱廻しがさらに二百年近くは遡ることになった」云々（第四章第一節）とある点について、円覚寺門前出土の「山猫」かしらが、首掛け箱廻しの「山猫」かしらであることを証明するプロセスを、より明晰かつ慎重な記述により提示されることが望ましいといった問題点があげられる。

近世人形浄瑠璃史研究の立場からも、結論を急ぎすぎた箇所がなきにしもあらずで、地方各座の伝承や近世後期の書留めを重視し過ぎる姿勢には疑問も残る。加えて論文全般にわたり、学位論文の記述としては文章表現上やや論理性を欠く傾向が見受けられる。

上記の如き難点はあるながら、本論文は申請者の精力的な全国踏査、出土品・伝存品の操り人形、操り人形と隣接する玩具や飾り人形等を含め、前記四千数百をはるかに超える膨大な数の人形かしらを実見し、構造上の問題をあらゆる角度から熟考していることにより、提示された新見は、おおむね、強い説得力を有する。人形浄瑠璃研究者は、永田衡吉氏をはじめ数人の老大家を除き、出土かしらという第一級資料に対し、従来無関心であった。他領域に関わる事柄に踏み込むことを、避けてきた面もあった。本論文はそのような学界の閉鎖的傾向に見直しを迫る意味からも、きわめて有意義な研究であるといえる。

以上の理由をもって、本論文は、博士（文学）学位を授与するにふさわしい業績であると認定するものである。

2004年11月11日

主任審査委員	早稲田大学教授	文学博士（早大）	内山美樹子
	早稲田大学教授	文学博士（早大）	菊池 徹夫
	早稲田大学教授	博士（文学）（早大）	海老澤 衷
	早稲田大学助教授		和田 修
	早稲田大学名誉教授		鳥越 文藏